

「主体的・対話的な学び」 — 学びを転換させるには —

帝京科学大学教育人間科学部教授 けんもち つとむ 釘持 勉

「主体的・対話的な学び」とは

新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導改善が求められています。その意味は、2016年12月に示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」において、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の必要性が提起されています。そこには、「(前略) 子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである」と述べられています。

では、これからの書写指導においては、どのような学びに転換させていくことになるのでしょうか。以下、整理してみましょう。

① 「受身的な学び」から「主体的な学び」へ

「手本を見て書きなさい」「このなかから選んで書きなさい」「黙って書きなさい」というような教室での教師の投げかけが少なくありません。この姿を「筆圧が強くなっているところに注意して、自分のめあてに向かって練習していきましょう」「自分の課題に合わせて、教材を選択して練習していきましょう」「書き終わったら、同じ課題のお友達と相互評価をして自分の次の課題を見つけましょう」という学びに転換できる支援をしていくことが大切です。

ここでいう「主体的な学び」への転換について、書写指導においては、教師中心型の指導から児童の側に立った指導が前提になります。教師としての指導性を発揮する「教師主体の授業」として「上手に書かせる」「美しい文字を書けるようにする」ことに注視しがちである授業を転換させることにあります。

児童の「書かされる書写の授業」「どうして毛筆学習をするのかわからない」「毛筆は難しく楽しくない」といった声に対して、「毛筆は硬筆の基礎であること」「毛筆で学んだことを硬筆に生かすこと」「毛筆で大きく書くことで力を入れるところがわかる」などに理解を深めていき、正しく整った文字の書き方を学ぶ授業に転換させていくことになります。

そのためには、目的に合わせた筆記具の選択、自分の課題に合わせた教材の選択、学ぶための自作の練習用紙の作成、相手意識・目的意識をもって書く活動など、児童の側に立った学びが必要となります。そこには、「受身的な学び」から「主体的な学び」への転換が欠かせません。

② 「一人学び」から「対話的な学び」へ

「自分だけが課題を達成すればよい」という段階から、「よりよい課題達成に向けて周りの児童とともに高めていく」に転換させていくことが大切なことです。硬筆、毛筆指導において、どうしても個別指導になりがちですが、少人数グループでの学びによって、お互いに高め合う場の提供を前提として、授業を構築していく必要があります。そして、「言葉を筆の動きに」「言葉を鉛筆の使い方に」「言葉を文字に」反映できるようにしていかなければなりません。

書写の授業では、隣の児童相互の活動がしやすい環境にあります。対話的な学びを成立させて、学びの深化を図る必要があります。では、対話の成立をどのように考えればよいのでしょうか。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ●うなづきをする ●「おなじ」「ちがう」でも対話となる ●「うん」だけでも対話となる ●思いやりの精神で関わり合う ●指で指して説明できる
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ●いろいろな考えがあることを理解する ●相手の考えと自分の考えとは違うことを知る <p>(理想の文字はわかっているにもかかわらず整った文字が書けない現状もある)</p>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ●自他の違いがわかり、課題意識を強くしていく ●承認の欲求が強くなる ●自分に厳しく、他人に思いやりの気持ちを表すようになる

③ 「結果の学び」から「過程の学び」へ

今回の学習指導要領では、「学ぶ内容」だけでなく、「学ぶ過程」が一層重視されなければなりません。まさに、評価観の転換を意味していると考えする必要があります。その意味では、書写では、自己批評、自己評価、相互批評、相互評価を日常的な評価活動として取り入れているため、目的に合わせて、立場を踏まえて、根拠に基づいて評価活動をすることができます。

教師の評価から自己評価、相互評価への転換の日常化をさらに進めていくこと、少人数での対話的な関わりによって学びの共有化を図ること、自己の課題に対しての自己内対話をすることで、書字力育成につなげていく力を的確に高めていくことになります。

これまでの書写指導に「書写用語を使ってみたらわかりやすかった」「友達との関わりをもつことで、学びが楽しくなった」「点画を細部に見るようになったので、自己の書字力の高まりが実感できた」という声が聞かれるような授業を想定しましょう。そのためには、発問ひとつ、助言ひとつで基礎知識として身につけることが増え、最終目標である書字力の高まりを感じて、文字感覚の高揚を実感できるようにしていくのです。教師の評価観の転換を自信をもって行っていきましょう。

